

氷河が描き、 山火事が晒した造形美

北海道の屋根大雪山の北、北見山地の北端がゆるやかに宗谷海峡へ落ち込むところ、それが宗谷丘陵だ。一番高いモイマ山でも高さは235m。稚内市、豊富町の東側にある緩やかな起伏の丘陵は、空からは指を揃えたように並んで見える。この規則的な「指の並び」地形が周氷河地形だ。意味としては「氷河の・周囲に形成された・地形」である。ではなぜ、こんな地形ができたのか？

氷河の周囲では土壌の表層の凍結と融解が繰り返されて、表層の土壌が融けると斜面上部の石や砂は下へ転げ落ちる。加えて凹んだ谷の部分は融けた水や雨水が流れて浸食が進行する。この繰り返してなだらかな地形が造られる。その後、氷河は消えて地形だけが残ったのだ。

こうして形成されたなだらかな丘陵は間氷期になると次第に植物に覆われ、ついには森林が発達することになって、かつては立派な森林に覆われていた。

この状態はずっと続いていたと推定されるが、北海道に住む人が徳川時代中期から増加するにつれて森林の伐採が始まった。しかし、明治年間まではそれでもかなりの森林があったと推定される。

この地方の森林は明治後期にかなり伐採され、さらに大正年間に起きた大規模な山火事で失われた。この時の山火事でいまの稚内市の抜海海岸か